



872

講談社現代新書



国際

円高ドル安にもかかわらず、ドルが国際通貨NO1の理由。自由で無国籍、拡大するユーロ市場の実態。世界を震撼させたブラジルやメキシコのデフォルト危機。突出する日本の金融資産とアメリカの巨額な対外債務。各国マネー・センター間の争闘、米ソの世界金融戦略など、マネーという怪物を介して演じられる、もう一つの戦争の実態と行方を解説。

マネー戦争

金融危機は来るか

及能正男

国際マネー戦争

昭和六二年一〇月二〇日第一刷発行

定価——五三〇円

著者——及能正男

©Masao Kyuno 1987 Printed in Japan



発行者——加藤勝久 発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目三—三 郵便番号二三 電話〇三—九四五—二二

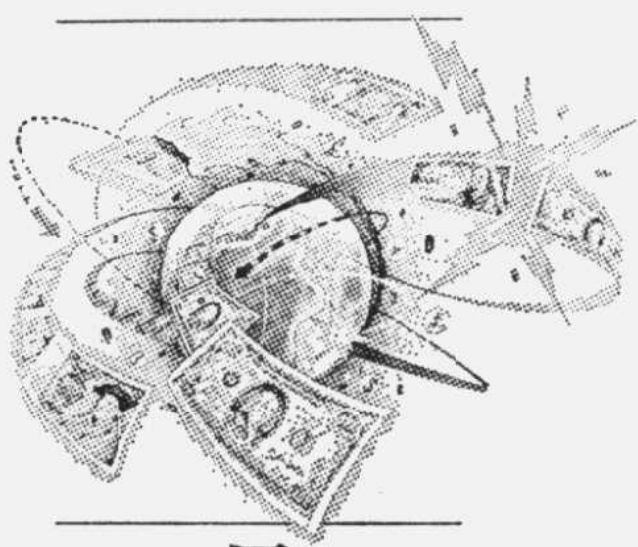
装幀者——杉浦康平＋赤崎正一

印刷所——凸版印刷株式会社 製本所——株式会社大進堂

ISBN 4-06-14872-4(0)

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは、学芸図書第一出版部あてに願います。

000
711
935



國際マネー戦争

现代国际关系研究所

★ 230460 ★

图书馆藏书章

及能正男

yah 68/15631

講談社現代新書

RB

1988. 10. 24.

「国際金融は、いしばしば少数の裁定取引に
長けたものや中央銀行マンのみが理解でき
る一種の秘教である、とみられている」

R・Z・アリバー

●目次

プロローグ 7

1—現代の妖怪——国際金融問題の展開……………15

徘徊する四大妖怪／今なお君臨するドル／なぜドルは国際通貨なのか／ドルの拡散化とユーロ市場の誕生／ユーロ市場への衝撃／累積債務問題と国際金融不安／金融新商品の開発と展開／日本金融業の国際的突出／円の国際化と切上げ／巨大マネー軍団化した邦銀／疲勞する日本経済／米ソの切札とは／西側経済に組みこまれるソ連／国際金融を舞台にした米ソの角逐

2—アメリカの金融的支配力……………45

バックス・アメリカーナ／ドル価値の下落／国際通貨の条件／ドルの妖怪性／アメリカの金融革命の進行／銀行に対する規制と金融業界の混乱／銀行の証券業務への進出／何がアメリカで起こっているのか／国際金融市場への波及／コンピュータ革命／金融革命、三つのD

3—ユーロ市場——ドルの裏返しの世界……………71

流動性資金需要の発生／ユーロ市場はなぜできたか／ユーロ・バンキング・ビジネスの発展／ユーロ・カレンシー市場の広範な形成／グローバル化への証明／市場の規模／漠とした市場の総合体／ユーロ市場内の各市場／ユーロダラー取引のしくみ／リスクそのものの世界／八二年の一時停滞期／シンジケート・ローンの成功／三つの危機／デフォルトの危機と市場の沈滞／外債とユーロ債／ユーロ債への傾斜／ユーロ市場における証券化の流れ／ローンの退潮／FR

Nの増勢／ローン・債券の中間型商品群の誕生／ファシリティに対する規制／ローン自体の流動化／商業銀行の業務分野拡大／米国型CPの主要商品化／ユーロ市場の現状をどう評価するか／国際金融危機の接点／薄氷上の世界

4—日本の経済と金融のオーバープレゼンス……………127

巨大な一方通行のカネの流れ／ナースな日本の機関投資家／抜本的な解決策はあるか／日本の責任と米国の責任／世界経済の破壊者としての日本／進まぬ円の国際化

5—暗く不吉な影——債務累積問題の真の脅威……………143

ローマックス博士の慧眼／特殊ケースと見られたポーランド／メキシカン・ウィークエンド／真因はオイル・マネーの還流／圧倒的なアメリカの統率力／死期を延ばしただけか／種々の解決策の長所短

所／大恐慌の引き金になるか

6―国際金融ゲームの諸相……………159

リストラクチュアリング・ブーム／LBOとジャンク・ボンド／短期買収の資金サポート／会社乗っ取り攻防の手口／経済社会の掃除屋としての役割／プライバティゼーション／資金需要者としての国家独占企業体群／セキュライゼーションの波／モーゲージ・ローンの証券化／証券化できないものはない／証券化の問題点／証券化がもたらした余波／グローバリゼーション／東京外為市場の特色／市場間競争時代へ／東証空洞化の危険性／グローバリゼーションのめざす姿

7―国際金融の背後の世界……………199

国際金融と現実世界／市場の安全性保持の問題／摩擦の時代／経済

摩擦から文化摩擦へ／日本金融市場開放をめぐる摩擦／米ソの軍事的対立／社会主義圏への金融支援の問題／アメリカの穀物戦略／食糧戦略対象国として最適な日本／石油自給体制をとる世界列強／オイル・ショックは再現するか／通貨としての金は死んだか／戦略物資レア・メタル

エビローク——マネー戦争の行きつく先 230

眼に見えない「敵」／「シナリオA」——現況の拡大／「シナリオB」

——米国の緊急政策発動／「シナリオC」——第三次石油危機発生

あとがき 237

本文注解説 240

参考文献 241

プロローグ

「神秘の魔力に日の光を当ててはならない」

(ウォルター・パジヨット)

国際金融とは中世の昔から、いかがわしい商売ということになっている。ゴルフでいえば、グリーンやホールが見えないティー・グラウンドから、第一打をヤツとばかり打つようなものだからである。日本国内の金融問題にしたところで、今日は明日のことがわからない混戦状態になっているのに、国際金融とは文字どおり明日どころか、一瞬先をも知れない外国の為替相場や金利や経済などを取扱うのだからである。本質的に見通しがつけない外国のことだし、何を考えているのかわからない外国人とその社会を相手にするのだから、よく勉強もしなければならぬ。だから、昔から国際金融とは不可解、不可思議、不可測と不可知論の別名ともいわれるゆえんである。

国際金融の世界とは、いったいどのような世界なのだろう。国際金融、インターナショナル・ファイナンスと呼ばれる金融業務は、国内の金融取引と、どのように違うのだろうか。国内の預金や銀行借入れ、証券売買などは日常よく行なわれることだし、理解もとくにむずかし

いことではない。しかし、国際金融と字画の多い漢字が四つも重なると、ふつうの人はアレルギーを起こすようである。円ドル問題、発展途上国累積債務、欧州のユーロ市場、東京オフィス市場等々と並ぶと、何となく重大なことのようではあるが、当面ちよつと関係ないなど考えるのが、むしろふつうである。

この本は、そのようなアレルギーを若干なりとも解消するための書物である。

元来、国際金融というのは何がそれかという定義は、どんな大学者でも困難である。範囲や内容が確定しない業務や学問が存在するのかと問われることが、国際金融論体系構成の大きな弱点のひとつであるだろう。というのも、国際金融業務の実体は日々変動・発展する国際金融取引が中核であって、国際金融論は主体が取引実態の把握、その外側に歴史・制度・機構が位置する全体構成となっているからである。そのため、主要内容が変動するとともに、その内容の各部分の比重が時に応じて劇的に変化するからでもある。そのドラマティックな激変のひとつの例をあげよう。

国際金融市場が第二次石油危機の混乱から徐々に脱して、順調に展開しはじめたかにみえた一九八二年の夏、突如として世界の国際金融市場を震撼させたのは、メキシコの債務支払い不能事態の発表であった。原油価格が急激に引上げられても、産油国のふところに貯まったオイル・ダラーを順調に世界市場に回転・還流させてゆくことができれば、結局は国際金融市場は

うまく機能してゆくだろうという、一応の安心感がゆきわたった時に、メキシコ問題が勃発した。それは、あたかも天上の予定調和運動をふいに攪乱するかのようによ、發展途上国累積債務爆発が突発し、八二年八月以降、すべての先進国の銀行・金融機関は日夜、累積債務問題の悪夢にさいなまれるようになったのである。

發展途上国にどのように開發援助や國際收支の赤字補填をするかは、もちろん八二年以前からの國際金融の問題の大きなひとつではあった。しかし、それが舞台の正面に躍り出るようになったのは、実にこのメキシカン・ホリデー事件が契機である。

國際金融とは、世界中に縫い目のみえない一見精緻なファイナンスの衣裳を織りあげ、きっちりと身にまとっているかにみえる。しかし、これまでに國際金融全宇宙の統一体としての機能を損いかける事件が数多く突発した。西独ヘルシュタット銀行倒産、イラン革命、オイル・ショック、累積債務国支払能力の瓦壊、バンコ・アンプロシアノ倒産、等々である。

しかし、どのような深刻な危機の発生に対しても、國際金融市場はその異常性と危険性と深まる不安感とを巧妙に管理し、機能を正常化させる異常な力量をみずから示してきたのであった。これはすでに一九二九年のごとき金融の世界的大恐慌を再現させまいとする、全世界の國際金融関係者の固い決意以外にその原因を求めべくもない。

たしかに國際的な金融協調や政府間協商、國際的金融機関群の整備と拡充、統計・報告・調査

研究の高度化による危機予兆の早期把握、国際金融論研究分野の飛躍的拡充などが、国際金融の大宇宙の度重なる崩壊への危機を防止してきたことはまぎれもない事実ではある。ただし国際金融市場が戦後から現在ののような精緻な構造にまで発展したこと、また上述のようなクライシスを管理し、抑圧してきたことは、いくら国家間の協調や制度の確立があったとはいえ、それだけでは説明しきれないのである。市場関係者全員の揺ぎない市場と市場原理への信頼感が広範に存在することによって初めて可能なのである。

では、国際金融の世界と日本はどう結びついているのであろうか。すでにこの世界とはわが国は実は分かちがたく結合されているのである。むしろ、今となっては相互に命綱を握りあっているといつてよいであろう。

現在の日本は、国全体がマネーに浸^{ひた}されているだけでなく、海外でのマネー戦争に深く関わり合いを持っている。貿易量年間三、〇〇〇億ドルのうち総計二、三五〇億ドルほどがドル金融だし、企業資金調達は年間一五〇億ドルほどを海外に仰いでいる。主要国内銀行資産の三分の一ほどは海外にあり、欧州を中心とするユーロ市場や米国商業銀行よりの借入れ、ニューヨークの銀行引受け手形市場や最近はコマース・ペーパー市場での資金利用は巨額に上っている。そもそも日本の法人・個人が米国三〇年国債を中心とする巨額の証券投資残高を抱えている、米国の財政赤字の穴埋めをしていることは秘密でも何でもない。

このように国際金融の世界と深い関係に立っている日本経済全体は、ひとたび国際金融の世界が大きく振れる時、いつでも必ず巨大な影響を受けてきた。一九七一年のニクソン・ショック、七三年・七九年のオイル・ショック、七四年の西独ヘルシュタット銀行倒産によるユーロ市場麻痺事件、八二年のバンコ・アンプロシアノ倒産事件、同年と八七年に全世界的に発生した発展途上国累積債務爆発であり、八五年のプラザG5会合であった。小さな事件を数えあげるとキリがない。株式市場にまで影響した事件は古くはスターリン死去、IOS (Investors Overseas Services スイスの投資信託) 倒産旋風などから始まって、近くはユーロ債市場の永久債問題、住友銀行リゴルドマン・サックス提携等々がある。

極東の四つの小島で金まわり豊かに世界の動きと無関係にノンビリ暮らすなどということは至難である。むしろ日本が大きく世界全体の産業や金融や技術分野に乗り出してゆく局面局面において、大きく欧米の力とまともに激突する場面が連続して発生し、むしろそれらが常時継続的に生起しているのが現実である。いわば「ジャパン・プロブレム」の発生震源地として世界の注目を良くも悪くも浴びているのである。

一九七〇年代までは日本はよくて欧米一流紙の経済面、社会面に載る程度であった。今や、クオリティ・ペーパーの第一面にジャパン・ヤーパン・ジャボンの字が掲載されない日はないのが現状であろう。

産業や技術や経営面での日本の優位はほとんど異論なく迎えられている。しかし、こと金融の問題については各国いずれもそれが国全体の経済的安全や企業支配や資産運用、課税問題等にからみ、さらに一国全体の金融システムの安全性防護の点からコントロールを強めているのである。一九七五年の米国証券手数料自由化（いわゆるメーデー事件）から生起し、世界に強烈な勢いで伝播している金融革命なり金融市場開放運動が、ほぼ一九八〇年代中央で大きなメドがついた段階で、今度は逆に自由奔放な動きに対し監視や規制を強化してゆこうとの反対の動きもでてきているのである。

日本の金融は経済全体の国際化にくらべると、いちじるしく跛行的な発展をつづけてきた。小さく、固くまとまって国際化・自由化を国内で抑えつけてきた。しかし、次第に極東の四島に累積される一億二、四〇〇万人の国民の富は巨大となり、その中心たる東京金融資本市場は、今や各先進国政府・金融・経済関係者の参入意欲をかきたてる草刈場の観を呈している。また途上国群もカネ持ち国家ニッポンの動向を注意深くうかがっているのが現況である。まさに二〇世紀の黄金郷（エルドラド）こそ日本である。

国際金融というむずかしそうな漢字が四つも並ぶと、一般の人々はまず食欲をそがれるのがふつうだし、円ドル問題ひとつをとらえても、その複雑な背景まで考えることは通常しないものだ。しかし、ソ連・中国大陸の東側に少し距離をおいて巨大な繁栄を続けてきた無防備の経済

大国・政治小国が存在しているという地政学的地位は変わりようがないし、欧州とは八時間、米国東海岸とは一四時間の時差のある国家立地は、四囲を先進国に囲まれている西独や英国、フランスとおのずから異なった政治・経済・金融・社会環境にあることは自明である。そしてわが国存立の基盤が他国民との協調以外にないとすれば、少なくとも国際金融のシステムやその動きをよく理解しておかねばならないだろう。

日本のいわゆる全国紙は全体三二ページのうち、「国際」部分にわずか一〜二ページ、しかも広告を除くと一ページの三分の二ほどしかスペースを割かない。それで今まではよかったのかもしれない。しかし、これからは欧米の一流紙といわれる新聞のように、フロントページからそのほとんどが国際ニュースで占められるようにならざるをえないであろう。国内の動きは一流紙でこと細かに報道する必要はないし、そのような報道メディアは別にあるべきだろう。日本人であればたいがい国内のことはおのずからわかるものである。そうはいっても一挙にそのような国民全体の国際化が進歩するものではないし、時間がかかる話でもあるだろう。

本書は、国際金融市場を舞台としたマネー戦争を主要テーマとしている。第一章は戦線全体の概況報告であり、第二〜五章は各戦場ごとの戦闘詳報である。第六〜七章では全体的戦略問題の流れをとらえてみた。読者各位はもちろんどころからお読み下さってもかまわない。

為替ブローカーのデイトリング・ルーム（東京・日本橋の上田ハロー）



1—現代の妖怪——国際金融問題の展開